「視聴覚革命と五感のバランス～歴史に学ぶ～」

㈱松栄堂代表取締役社長
畑　　正　高 委員
（第３回会議　平成18年２月26日）

本日はこどもみらい館での会議となりました。

私はこの竹間学区に住んでいます。竹間幼稚園や竹間小学校で学びました。子どもの時に憧れた先生，誰にでもいらっしゃいますよね。私が入園したときにお世話になった先生が結婚されて姓が変られました。憧れの先生のお名前が変わられたことが，幼稚園児の時にショックだったことを覚えております。そういう，思い出がある場所です。いずれにしましても，ここで育ち，今は商売人でございまして，お香を商っております。よくこんなおもしろい商売，始めてくれたというのがいつもご先祖様に対する感謝でございます。お香には歴史があります。日本の歴史と大して変わらない程の歴史です。それが1200年～1400年ぐらいたった今も，ちゃんと日常生活でお使い頂いています。ありがたいことに，南国から伝わったお香は，お米やお茶と同じように日本の日常生活に根付いてきたのです。

今日は「視聴覚革命と五感のバランス～歴史に学ぶ～」と題しています。私は歴史とか伝統は土壌だと考えています。耕すべき土壌なんです。私たちは，例えば御所へ行って木々がきれいだなと思いますが，土の中の根っこには思いがいかないんです。目に見えている部分に気をとられすぎて，目に見えていない部分まで思いをはせる事はありません。御池通りの街路樹とか，時間という大きな力が固まっているように見えるんですけど，街路樹を育ててくれた土壌こそがむしろ大事なんです。土の中では，根っこをどの様に張ろうか，先っちょをどう延ばそうかと頑張っているんです。要はその根っこで枝木の力を出しているんですね。木陰を作ったり，人を愉しませたり，実や花を利用して社会還元したりできるかどうかは，その木自身の歴史の成果ではありますが，根っこという土台が大事なんですね。このように考えますと，人に見せる必要のない根っこを深く広く自由に張ることのできる歴史を，豊かな大地としていただいているという事が，大変な財産だと理解できます。そして私達自身がいずれその対地の肥やしとなるのです。

視聴覚について考えるところを述べます。光と音は波だという事実に注目する必要があります。波ですからデジタル化が可能になっているんです。私の子どもの時には視聴覚室で週に１回，１日１時間のテレビがすごく愉しみでした。それがいつのまにか，各テーブルに視聴覚設備がある。視聴覚という二つの世界は波だからこそ技術的に扱いやすかったんですね。

250年昔，イギリスで蒸気機関により産業革命が一気に進みまして，労働集約や大量生産が起こり，今まで家内制手工業をしていた人も工場へ行って働き始めました。私も学校

で習いました。さて，その産業革命の時代に生きた人が，ぼくらは産業革命に生きていると自覚していたでしょうか。その時代に一生懸命生きている人がその事を自覚していたとは思えないのです。それでは，私たちのこの時代を50年後100年後の人たちはなんと言うのでしょうか。私は「視聴覚革命の最終章に生きた人々」と言われるだろうと思っています。私は50代にして視聴覚革命の最終章に生きているわけですから，十分視聴覚革命に立ち向かう日常生活を自分なりに確保できるようになっているわけです。直進性のある光は手で隠したり，鏡に映したり，トリミングしたりと作為が可能です。音声や匂いは，特定の方だけに届けたいと思うのに，すべてのみなさんに届いてしまう。実は私たちを取り巻く情報というのは，それぞれの情報と私たちの感覚器官との関係に，それぞれの特性と個性との現実があるのです。それをよく理解して全てをバランスよくしていかないと，本来の私たちの安寧というものは確保されません。例えば，香りが環境として存在するとすぐに人間は慣れてしまいます。すぐに慣れるのが鼻の仕事なんです。だから，コーヒーが出てきたらコーヒーがおいしいし，次にスポンジケーキを食べたらバニラが香るのです。次から次へと新しい出会いを知覚するのが嗅覚の仕事であります。ですから，自分が環境に慣れれば慣れるほど，自分が一番わからないというのが嗅覚の本質なんですね。音だっていろんな音が集合して入ってきても，ひとつひとつの音を判断する必要があるわけです。ところが，目は違うでしょ。ずっと，５分10分でも１時間でも見られます。もっと言いますと，目は閉じることができますが，耳も鼻も閉じることはできません。ぜひその違いを理解しながら，「視聴覚」というものを考えていただきたいと願っています。

歴史を通じて香にまつわる話はいっぱいあります。それらの話が，一貫してというか連携してというか，ひとつの流れをもっているんです。最近ようやく「京都創生」ということで，京都の文化について考える流れが出てきています。枕草子に書き残された「春はあけぼの　やうやう白くなりゆく山ぎは」の山が京都の東山だと子供達に語りかけることが大切です。東山の美しい風景，私達の日常生活の中にそういう美しい歴史的な現実が息づいていることを是非気付いていただきたいと思います。

「枕草子」（29段　こころときめきするもの）を読みますと，ペットがかわいいとか，子どもが遊んでいる横に思わずしゃがみ込んでしまったとか，私達の日常と同じことに心を寄せています。そして「よきたき物」にも心ときめくというのです。色々な香料を配合して練り合わせたお香「たきもの」は憧れの方から届いたものでしょうか，かけがえのないものなのです。「よき」とは相対的ではなく絶対的な価値を意味しています。だからときめくんですね。

源氏物語の「若紫」には，香りがどれだけたくさんのことを教えてくれるものか，ほんの短い文章の中に実にすばらしいくだりがあります。光源氏が病気になって北山のお寺へ祈祷を受けに行くと，山深いその里に小さな女の子と老尼がいました。その奥の方から空薫物（そらだきもの）の香りが漂ってきます。そして，仏前に焚かれる供香の香りも満ちていました。空薫物の香りは貴族社会の中でこそ楽しまれる高雅な香りであり，山深い里に身を預け仏門に生きる女性達にそのような生活を可能とさせる後ろ盾が都にいることを

意味します。また，薫物を焚けるだけの教養を女性達が持ち合わせているという背景も伺えます。この二つの香の香りが漂う所に，光源氏は自身が身にまとっている香りを「追い風」として自らの後ろに残していくのですが，それが殊の外すばらしく，彼の存在感がいかに特別であるかという絶対性を教えてくれるのです。三つの香の香りによってお互いが限られた貴族社会に身を置く存在であること，身の回りの様子など語らずとも伝えています。このことからも分かるように，貴族たちの生活の中で見事に演出される香の香りは，大切な語り掛けであったのです。

正倉院御物の中に琵琶があります。これはご存じの通り大陸から届けられたものですので，唐様の意匠で彩られています。人々は当時，グローバルスタンダードである大陸の唐様を自分たちのものにしようと，漆の使い方や貝の使い方など工芸の技術を学びました。はじめはそれで良かったのですが，唐様のものを見ているうちに，柄が左右対称であることや，現実には存在しない鳥や花の文様に違和感を覚えるようになります。そこで，自分たちの身の回りにこそ心にやさしい，懐かしい世界があると気付くのです。つまり，普段から目にしているところからモチーフを求めて，自然と共生をしている日常を描くようになったのです。

そうして生み出された和様のものの一つに，「梅月蒔絵の文台」（東京国立博物館蔵）があります。とても薄い三日月の下に梅が咲いているこの蒔絵は本当に綺麗だと思うのですが，実は不思議なデザインなのです。このような薄い三日月の夜は，今日のようなライトアップもされていない時代のことですから，このように庭先の風景が見えるはずがないのです。シルエットが分かったとしても，梅が咲いていることまで鮮明に見えるはずはないでしょう。ではなぜ見えたのかといいますと，梅の香りが風に乗ってふとただよってきたのです。耳には水の流れも聞こえてきたことでしょう。梅の咲く頃ならまだまだ冷たく凍り付くような夜陰にあって，流水も水がゆるんで凍ってはいないのです。そして，縁側で冷たい空気を肌に感じ，お酒でも少し口に含んで暖をとりながら，この風景を心の目で見ていたのです。早春の暗闇の中で，庭先の梅が咲き誇って春を告げている。また今年も私に春が巡ってきた。まさに命の喜びを感じる瞬間だと思います。五感をもって，自分の前にある親しい現実を感じる，そういう世界だったのです。京都が養った季節感や美意識の中に，五感のバランスを取り戻すヒントを学んでほしいと思います。

ありがとうございました。

視聴覚革命と五感のバランス
～歴史に学ぶ～

◆『古今和歌集』

色よりも　香こそあはれと　おもほゆれ　誰が袖ふれし　やどの梅ぞも
（読人しらず）

君ならで　誰にか見せむ　梅の花　色をも香をも　しる人ぞしる
（とものり）

五月まつ　花橘の　香をかげば　昔の人の　袖の香ぞする
（読人知らず）

春の夜の　やみはあやなし　梅の花　色こそ見えね　かやはかくるる
（凡河内　みつね）

◆『枕　草　子』　清少納言

春はあけぼの。やうやうしろくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

「二九段　こころときめきするもの」

こころときめきするもの　雀の子飼。ちごあそばする所のまへわたる。よきたき物たきてひとりふしたる。唐鏡のすこしくらき見たる。よき男の車とどめて案内し問はせたる。かしらあらひ化粧じて、かうばしうしみたるきぬなどきたる。ことに見る人なき所にても心のうちはなほいとをかし。待つ人などのある夜、雨のおと、風の吹きゆるがすも、ふとおどろかる。

◆『源氏物語』　紫　式　部

「若　紫」

そらだきもの、心にくく薫りいで、名香の香など、匂いみちたるに、君の御追風、いと殊なれば、うちの人々も、心づかひすべかめり。

螺鈿紫檀五弦琵琶
正倉院宝物

梅月蒔絵文台
東京国立博物館蔵

（株）松栄堂　畑　正高